

◆ 講演とシンポジウム『ドナルド・キーンさん、鎌倉を語る』◆

日本文化の過去・現在・未来 ～鎌倉の歴史に学ぶもの～



ドナルド・キーンさん

日本文学研究者のドナルド・キーンさんは、東日本大震災の余波に揺れる日本への帰化を表明して注目されています。そのキーンさんをお招きし、平成23年10月29日、鎌倉世界遺産登録推進協議会主催により、講演とシンポジウムが開催されました。

講演に先だって、近藤誠一文化庁長官が、ビデオメッセージによりシンポジウムを祝し、キーンさんと鎌倉への思いを述べました。さらに講演を受けて開催されたシンポジウム『鎌倉の歴史から学ぶもの』で、コーディネーターの高木規矩郎さんからキーンさん、

佐藤美智子さん、富士川義之さんの3人のパネリストに「鎌倉の魅力」「世界遺産登録をめざす鎌倉への期待」について意見を伺いました。それぞれの発言要旨をご紹介します。

近藤誠一文化庁長官ビデオメッセージ(要旨)

キーン先生を囲んで「鎌倉を語る」シンポジウム開催おめでとうございます。このたびは日本国籍の取得を申請されたとのこと、大変うれしく思っています。日本の政治や経済が元気がなく、日本の誇る文化や芸術が何となく停滞気味です。日本国民全体が自信を失いつつあります。その中でキーン先生の日本文化への理解と人柄、そして海外への発信力は、私たちにとって大きな力となってまいりました。

私は中学と高校の多感な時代を鎌倉で過ごしました。心が鎌倉に近いのでなかなか客観的に見られないのですが、早期に世界遺産に登録できるように、私としても最善を尽くしたいと思います。

●ドナルド・キーンさん講演(要旨)

『私と鎌倉』

●満月の鎌倉大仏●

戦時中、私は米海軍の日本語学校で日本語を覚えました。私たち卒業生の仕事は日本軍が戦場に落とした書類の翻訳と、捕虜の尋問でした。中国に送られ、民間の日本人と親しくなりました。その年の12月にアメリカに帰国してもいいといわれました。青島を発つとき、親しかった日本人から「私が無事でいることを鎌倉に住む会社の社長に伝えてくれないか」と頼まれました。情報部の将校の案内で初めて鎌倉を訪れました。友人に大仏を見に行かないかと誘われました。突然、満月の光を浴びた素晴らしい仏像が現われました。

●鎌倉の印象●

昭和28年にアメリカの財団から奨学金を受けることになり、日本に行く夢がかないました。円覚寺の門は建築

ばかりでなく、建てられた場所によってもはるかな過去のものという印象を与えました。今の建長寺にも、場所に古さ、永遠さが残っています。大仏は取り巻く丘が大きな空間の一部を果たしています。京都は山がなければ退屈な場所ですが、鎌倉を取り巻く山も美しいです。

●高見順、川端康成の思い出●

高見順の日記に魅かれました。おとなしく健気で、我慢強く、謙虚、そして沈着な日本人に深い感銘を受けます。私の目にいつか涙がわいてきた。いとしき愛情で胸がいっぱいになった。私はこうした人々とともに生き、ともに死にたいと思いました。

鎌倉で最も密接な関係を持った作家は川端康成先生でした。インドの最も優れた小説家だったナラヤンが日本にやってきて、ぜひ日本の作家に会いたいと言われました。日本の作家が喜んで会はずだと思いましたが、数人の知人に電話をかけると、みな二べもなく断りました。ノーベル文学賞の受賞者だった川端先生は快く、インドの作家をお宅に招待してくださいました。